

「男ではなく、女だからということ、写真をとるのに何かプラスになることがある？」
よくわたしはこんな質問をうけることがある。その人の心にははじめから、女性だからと決めてかかるような調子を感じられる。むろん、その人の考えに誤りはないと思う。でもプラス、マイナスすれば、芸術や仕事の上に男女の区別などあるうとは信じられない。もちろん、それは撮影時の対象によつていろいろと違いはあるにしても、わたしの場合、男の人を撮影するときほど気が楽なことはない。というのは、男性というものは総じて、女性に対してはやさしく振舞ってくれるらしいからである。とくに、外国人のマドロスさんなど、余り好意的すぎて、こちらでシャッターをきろうとしても、わたしの手を握つてはなそうともしないのには困惑してしまう。

つまり、わたしが、まだ若い女であるがゆえに得^ぞをしているのかもしれない。

また、わたしが赤線地帯へやすやすと足をふみいれることができたのも、女性なるがゆえに、非常に効果的だったのかもしれない。というのも、彼女たちに変な警戒心を起させなかつたからともいえる。

「女同士だからね……」と誰かの声が聞える。けれども、単に女同士だからといつて、彼

女たちから見れば、別世界の人間を警戒する本能的な反感がひそんでいることを見逃してはならない。

彼女たちは自分たちと肌の合わないものに対しては敏感に警戒心を働かせるのだ。そういう彼女たちに、わたしが余り警戒もされず、むしろ歓迎されたということが、わたしの仕事のうえて大いにプラスになったのだ。そういった偶然の一致がなかつたら、わたしは何ひとつ仕事らしい仕事を仕上げられなかつたに違いない。

わたしは、こんな風にして彼女たちの警戒心を解きほぐして行つた。

——いつも、わたしはスカートをはいて、下駄をつつかけ、カメラを左手に、何気なく、その辺を散歩しているお嬢さんといった印象を与えるような恰好で、ぶらつと赤線地帯へはいつて行つた。もし、ジャンパーとズボンだつたら、わたしはたちまち警戒の眼で見られたに違いない。

そのわたしのふくらんだ上衣のポケットには、交換レンズとフィルムが忍ばせてある。白日にさらされて彼女たちは、所在なく、店のまえに立つていた。わたしは直感的に、この娘なら、と狙いをつけて近づき、道を尋ねた。もちろん、彼女に詳しいことなど解らうはずもない。

「写真とつてあげようか……」わたしはほんの思いつきのようという。すると、相手の娘は、少しの疑心もなく、じゃ、みんな呼んでくるから一緒に写してよ——と嬉しそうに店

のなかへはいつて仲間を呼んでくる。わたしは内心をかくして、彼女たち五、六人を二列に並べさせて、二枚ほどシャッターを切る。次いで、素速くこんどは一〇〇mmの望遠レンズを取りつけ、そのなかの一人にピンントを合わせる。その女はこの街でも、一、二を争うほどのいい顔の女である。一〇〇mmのレンズに狙われていることなど夢にも知らない彼女たちは、真剣な表情でわたしのほうを見つめている。わたしのカメラは、こうして厚化粧の下にかくされている小皺の一つ一つまでもはつきりとフィルムに写しとつてしまうのだ。

大抵はこの術で、最初のきつかけができ、少しずつ親しみを増し、警戒心は雪のように溶けてしまうのだつた。

けれども、わたしははじめからこんな風に大膽に振舞つたわけではない。わたしが、最初に捉えた彼女たちの生體は、いわば、遠くからそつとうかがつているといつた感じだつた。お風呂へ行く彼女たちとか、洗濯をしている彼女たちとか、立食いをしている姿とか——大抵、午後の二時ごろになると、彼女たちは、この街のほぼ中心にある風呂屋へ、三三五五、連れだつて行くのが日課の一つである。彼女たちは申合せたように、風呂道具のはいつた色とりどりの容器を片手に、髪にはげばしいターバンをまいていいる。お風呂を出ると、すぐまえのお菓子屋によつて、一本十円のラムネで喉をうるおしたり、アイ

スキャンデーをかじりながら帰途につく。そういう彼女たちの姿を、わたしは風呂屋の塀の角に身をかくして、望遠レンズでキャッチするくらいが精一杯だつた。そのころのわたしは、まだ純粋に彼女たちの姿態をとらえるにしても、変形された憎しみをすつかり洗いおとすところまでには成長していなかつたせいもある。

解題

女性写真家の成長の記録

今でこそ、女性写真家の数も増え、その存在もごくあたりまえになってきた。写真学校や大学の写真学科では、一九九〇年代に学生の男女比率が逆転し、「女性写真家ブーム」といった声も聞こえてくる。だが、常盤とよ子（刀洋子）が写真家として活動しはじめた一九五〇年代はそうではなかった。「カメラウーマン」の数は限られており、極端な男性中心社会の中で、彼女たちは珍種の動物を見るような好奇の目にさらされなければならなかったのである。

常盤はそんな状況に果敢に挑戦していった草分けの一人である。「普通のお嬢さんが考えているようなことを考え、漠然と、やがてお嫁さんになるつもりで、お花とかお茶とか——ありきたりのお稽古ごとに、余暇をさいていた」一人の女性が、カメラという表現手段を手にする

ことで人生を大きく変えていった。女性ばかりのアマチュア写真クラブ「白百合カメラクラブ」に入会し、やがて「プロ写真家」になることに目標を定めていく。

彼女が被写体として選んだのは「働らく女性」だった。デパートの女店員、女子プロレスラー、海女、ちんどん屋、ヌードモデル、ダンサーなど、さまざまな職業につき、それぞれの生き方を全うしようとしている女性たちをテーマにした写真展「働らく女性」は、一九五六年四月に小西六フォトギャラリーで開催され、大きな反響を呼んだ。二十六歳の新進女性写真家の登場である。

この展覧会がマスコミの注目を集めたのは、作者が女性だったということだけではなく、その中に「赤線地帯の女」の写真八枚が含まれていたからでもあった。当時は、売春防止法（一九五八年四月施行）が国会で論議されていた時期であり、「赤線」は興味を引く話題だったのである。一九五七年十月、常盤は最初の著書『危険な毒花』（三笠書房）を刊行する。その帯には「若い女性が、たった一人、カメラを唯一の武器として、果敢に挑んだ『街の女』の記録と手記!」とあった。

ここに収録したのは、その第一章「危険な毒花」の冒頭の文章である。常盤が「赤線地帯」に踏み込んでいく様子が、率直



〈街の女 横浜 若葉町付近〉 1955頃

に語られている。時には「若い女である」ということを積極的に利用し、「スカートをはいて、下駄をつっかけ、カメラを左手に、何気なく、その辺を散歩しているお嬢さんといった印象を与えるような恰好で、ぶらつと」被写体となる女性たちに近づいていく。道を尋ね、そのついでにという感じで写真を撮る。そこには大袈裟な気負いは感じられない。

だが一方で、この文章の最後に記しているように、常盤は「赤線地帯」の女たちに「変形された憎しみ」を抱いていた。彼女が生まれ育った環境と、女たちの生き方があまりにもかけ離れていたためもあるのだろう。別な場所でも、撮影当初には「彼女たちに対して、微塵も愛情を覚えることもなく、可哀そうだななどと考えたことは一度もなかった。単なる素材としてカメラを向けていたにすぎなかった」とも書いている。

しかし、性病の検査をおこなう病院や更生施設などを撮影し、「彼女たちの生活の内部へはいりこんで行くにつれ」、愛情にも似た心理が芽生えてくる。そして、そこからさらに、「ああいう世界を探究したい」という、写真家としての自己意識が育ってくることになる。『危険な毒花』は優れたルポルタージュであるとともに、常盤自身の成長の記録でもあった。

この本の出版は、ともすればセンセーショナルな話題が先行しがちだった。しかし、そこには「女性が女性を見る」という、当時としては画期的な視点が明確に打ち出されていた。